

令和6年度 第3回文京区障害者地域自立支援協議会

第3回相談・地域生活支援専門部会

日時 令和7年3月28日（金）午後2時00分から午後4時00分まで

場所 文京シビックセンター 障害者会館A・B会議室

<会議次第>

1 開会

2 議題

(1) 文京区障害者地域自立支援協議会（全体会）における当部会の活動発表の報告

(2) 支援を円滑に引き継いでいく方法について

- ・ワーキンググループ進捗報告

- ・次年度方針検討

(3) 暮らしをサポートする仕組みについて

- ・前回報告事例2件から暮らしをサポートする仕組み構築に向けた検討

(グループワーク形式)

3 その他

《その他配付資料》

- ・【資料第1号】令和6年度 文京区障害者地域自立支援協議会

相談・地域生活支援専門部会活動発表

- ・【資料第2号】障害福祉サービスから介護保険サービス移行までの流れ

- ・【資料3号-1】グループ一覧

- ・【資料3号-2】暮らしをサポートする仕組みについて検討の経過

<障害者地域自立支援協議会委員（名簿順）>

樋口 勝 部会長、浦田 愛 副部会長、志村 健一 副会長

高田 俊太郎 委員、関根 義雄 委員、三輪 加子 委員、阿部 智子 委員、井口 勝男 委員

夏堀 龍暢 委員、松尾 裕子 委員、中川 穰 委員、岩井 佳子 委員、吉野 文江 委員、

佐古 陽子 委員、福田 洋司 委員、須田 浩史 委員、佐藤 祐司 委員、加藤 たか子 委員、

荒井 早紀 委員

欠席者

なし

<事務局>

出席者

菊池景子、河井美奈子、關亮太

望月大輔、鈴木周平

欠席者

なし

<傍聴者>

3名

1 開会

開会挨拶

文京区障害者地域自立支援協議会 副会長 志村健一氏より

2 議題

- (1) 令和6年度 文京区障害者地域自立支援協議会相談・地域生活支援専門部会活動発表
報告

・資料第1号について部会長より説明

- (2) 支援を円滑に引き継いでいく方法について

○ワーキンググループの進捗状況について

- ・毎月1回程度集まり、ワーキンググループを開催し引き継ぎチェックシートの検討を行った。基本的には支援者向けを想定しているが、当事者とともにこのチェックシートを活用してもらい、スムーズな移行続きができればと考えている。今後は様々な場面で活用できるよう、周知方法等についても検討していきたい
- ・ワーキンググループに参加することにより、自分自身の学びを得ることができた。今回、このチェックシートの作成にあたり得た知識を今後も活かしていきたい。
- ・ワーキンググループでは、本日の内容で完成と考えている。次年度は周知活動や高齢分野にどのように共有していくかを検討していきたい。最近では高齢分野の方から、障害福祉サービスについての質問を多く受けている。行政への確認も基幹相談支援センターを通してお願いしたい。また、次年度は親会にも、こちらのシートに

ついて報告を行い、協議会全体での活用もできると考えている。

○次年度方針検討

(委員意見)

- ・チェックシートについて、印刷物としての公表の他にも、ぜひ、インターネット上での公開もしていただき、他区の参考となるようにしてほしい。

- ・最近では、障害に関する作成物だとルビ有りのものとルビ無しのものがあるものが多い。本チェックシートを読む方は支援者だけではないかと思うので、障害当事者にも配慮した内容を検討してほしい。

- ・介護保険のケアマネジャーは、障害福祉サービスについての理解が乏しいことがある。介護保険サービスに移行するにあたり、利用できる、できなくなるサービス等をまとめるのもよいと思う。

- ・チェックシートの活用にあたり、どういったところで活用したいか、どのくらいの規模で配布を行うかを予算を検討するうえで、皆さんから意見をいただきたい。

→web媒体の活用ができるのであれば、それぞれの事業所で印刷をお願いする方法もあるかと思うが、周知するという意味ではまずは配布をしつつ内容を伝えることが望ましい。配布先としては、区内の拠点4か所、地域活動支援センター、指定特定相談支援事業所等は障害分野では必要だと思う。橋渡しの意味では、地域包括支援センターや居宅介護の事業者、ケアマネジャーのいらっしゃる事業者に配布を行うのが良い。

- ・ケアマネジャーの方はやはり、障害のサービスに関する知識は少ないので、大量に配布する必要はないが、少しずつでも配布を行えばよいのではないかな。また高齢分野の方には、本シートを使用した、研修の機会を設けてほしい。その後は、例えば必要な時にネットからプリントアウトできるというような形も必要だと思う。

- ・研修会については、YouTube等の動画配信サービスを利用した、研修の実施も検討いただきたい。

→印刷部数については、本日での確定は難しいが、事務局とともに検討していきたい。チェックシートを利用した研修についても、併せて検討を行っていくが、各圏域や相談支援事業所でも研修の実施を行えないか等、親会に諮っていきたい。インターネット上での資料のダウンロードや研修動画の配信については次年度の部会にて引き続き協議を行っていきたい。

→本チェックシートは、障害のある方が65歳を迎える際に、サービスの利用状況の変化や支援者の変化があることの不便さ、不利益を生まないように、という意図にて作成してきた。委員からは、誰にでも使いやすいようにすべきだという意見もあったが、まずは支援者側が理解を深めることから始めるために支援者向けのものとして作成を考えており、障害当事者等向けのものについては、今回の成果物をもとにブラッシュアップしていく形で、作成を考えていきたい。

また次年度については、配布だけではなく、事例を交えた勉強会を実施し、支援者が自身の役割や連携について具体的に考えられるようにしていきたい。また勉強会の実施にあたっては、地域の様々な連絡会や集まりとの連携も検討したい。さらには、先ほど副会長よりお話の合った動画配信についても、検討を行っていきたい。

→上記内容にて、今後の方針について委員より同意

(3) 暮らしをサポートする仕組みについて

部会長より資料第3－2号について説明。

○前回報告事例2件から暮らしをサポートする仕組み構築へ向けた検討

(グループワーク)

各グループの検討内容

グループ1：

事例1

- ・ 障害の特性からヘルパーの利用は引続き障害福祉サービスとなるのか、年齢的には介護保険への移行期となり、介護保険サービスへの切り替えが課題。
- ・ 過去のデイケア利用歴から、介護保険の通所系のサービス利用も選択肢となるが、本人はまだ60歳台と若く介護保険で利用している高齢層との適合性が課題。
- ・ 地域の居場所として地域活動支援センター等、地域の社会資源を活用することで生活リズムを整えることに繋がるのではないかな。
- ・ 深夜・早朝の大声は、障害特性の可能性も考慮しつつ、医療によるコントロールの検討が必要。
- ・ 今は在宅で生活しているが、精神保健福祉手帳1級と重度でもありGHなど将来的に生活できる居住先の確保について検討が必要である。

事例2

- ・なるべく一人で生活したいという本人の意向への寄り添い方が課題。本人の生き方を尊重しつつ必要な支援は何か検討する必要がある。
- ・住居の問題については、支援機関が持っている居住に関する情報や障害に理解のある不動産屋やGH情報など、関係者間の情報共有が重要。
- ・医療にかかりたくないという本人の意向がある中で悩ましい問題ではあるが、往診などを活用して見立てができるよう、医療に繋げる。

グループ2

事例1

- ・介護保険への移行することで、現在利用している障害福祉サービスと同等のサービスを受けられるか、継続的なケアが必要。
- ・高齢者あんしん相談センター、医療機関、薬局に加え、情報共有ツールとして医療用SNS（メディカルケアステーション等）の活用も資源として有用。
- ・大声などの症状があっても本人が地域で生活が続けられるように、地域の居場所や大人食堂、精神障害当事者の家族会といった資源の活用も検討。

事例2

- ・住居の確保として、居住支援サポートの活用や本人の状況に合わせたグループホームの利用など様々な居住支援が必要。
- ・医療的なアセスメントが必要。
- ・サービスの利用は希望しないが、一方で自立的にできる部分もある可能性を考慮し、就労についての支援検討。
- ・町会や地域住民との繋がりなど、地域に根差した日中活動先の可能性を検討。

グループ3

事例1

- ・本人が望む安心した生活とは何か、希望を丁寧に聞き取ることがポイントとなる。
- ・トラブルが起きた時に適切にSOSが出せるか、SOSの発信方法を本人の自尊心に配慮し確認する必要がある。
- ・現在利用中の障害福祉サービスと65歳以降の介護保険サービスへの移行期において支援機関がきちんと連携し橋渡しをすることで、本人の取り巻く環境変化を最小限

に抑えることができる。

- ・（文京区にはないが）自立生活援助サービスの導入により、月2回の定期的な見守り体制を構築することができる。
- ・年齢や障害の有無に関わらず、長期にわたり安心して生活できるグループホームがあると安心して生活できる環境を整えることができる。

事例 2

- ・住居の問題については居住支援協議会への積極的な関与が必要である。
- ・障害分野や介護分野での連携不足を解消することで自立支援につなげていくべきである。
- ・現在文京区では、賃貸物件のバリアフリー化への補助金はあるが、退去時の原状復帰への補助はないため退去費用が本人の負担となってしまう。設置した手すり等を退去の際に後の入居者のためにも残すことを、住居のオーナー等にユニバーサルデザインの重要性を啓もうしていく必要がある。

グループ 4

事例 1

- ・本人の希望に焦点を当てた支援が必要である。
- ・深夜、早朝の大声に対する具体的な対策として、防音カーテンの追加など物理的な対応を検討。
- ・外での喧嘩を避けるため、移動支援を活用した外出時の付き添いを提案。
- ・地域生活センターの利用などを促し、生活リズムの安定化を図る。日中の活動時間が増えると夜はよく眠れるようになるなど、睡眠リズムが整うことにもつながるのではないか。
- ・かかりつけ医との連携を強化し、妄想や幻聴との付き合い方を改めて学ぶ機会を設ける。
- ・今後の高齢サービスへの連携は、ケアマネジャーが中心となっていくのが適切であるという意見が出た。

事例 2

- ・安心して相談できる機関として、あんしん拠点の紹介が有効ではないかという意見が出た。

- ・書類手続きが苦手な本人に対し、社会福祉協議会などのサービスを活用し、郵送物の開封や内容確認のサポートを検討する。
- ・老朽化したアパートへの対応として、理解あるオーナーや不動産業者の開拓が必要。
- ・他区にある居住支援法人や精神障害者向けの障害者住宅が文京区にはないため、これらの必要性が議論された。これは今後の地域課題として取り組むべき点であるという意見が出た。

（樋口部会長）今回各グループよりいただいた意見については、事務局とも振り返りを行いながら、運営会議にも上げていく項目の整理もしていきたい。また来年度については、精神障害の方だけでなく、身体・知的障害の方の事例も扱っていく予定である。

（4） その他

・ 志村副会長より総括

グループワークにて複数のグループから居住支援法人の話が出たが、今後、居住支援法人との勉強会など検討するのもよい。住まいの確保は文京区の長年の課題であり、ハウジングファーストの考え方にも通じるように、住まいの安定が利用者の生活安定に不可欠である。障害・高齢、医療など、その関係性を地域とどうつなげていくかということも重要だと感じた。

また、地域における伴走型の支援においては、医療モデルのような終結という概念ではなく、関係性を維持し、バトンタッチしていくことが重要であり、事例検討からも関係性の重要性が強く感じられた。事例のような障害を抱えた方に対して地域社会には依然として不安や敬遠がある。地域で生活していくために支援者の尽力が必要となるが、支援者の孤立を防ぐためにも、このような協議会を活用し、関係機関が日頃の支援について検討していきたい。

以上